

作家名	いとうじん	作品名	いけべぼしよく(ほっかいどうちよう)		
	伊藤仁		池辺暮色(北海道庁)		
	ITO, Jin				
生没年	1915-1996				
出生地	北海道芦別市	作品名 補足			
No Image		制作年	1975-1977 年		
		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	116.7×91.2cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和5年度	号数	F50	評価額	2,400,000 円

作家略歴

1915年北海道札幌市生まれ。1934年に仙台高等工業学校機械科(現東北大学)に入学し、油彩を独学で始める。1937年の卒業後、旧国鉄にエンジニアとして就職する。戦前・戦時下で画材が不足する中、余暇で制作を続けた。戦後間もなく、国鉄労働組合に結成に参加したが、1947年に日本美術会会員となり、1949年には職を辞して職業画家となった。

1952年に北海道生活派美術集団を結成、さらに1960年に東京でグループ草炎会を創立。この頃までは、戦争の傷跡が残る街並みや自身の妻子の姿を、茶褐色を基調とした色彩で描いた。1967年に、フランス、イタリア、スペインなど欧州六か国を周遊し、各地の風景を描きながら印象派の作品を研究する。帰国後は作風が一転し、灰色がかった淡い色彩を多用して、札幌の古い建物や風景などを情感豊かに描くようになった。

1979年、エルム画廊より銅版画集『さっぽろ西洋館』(全五巻、計二十五点)を刊行。明治～大正期に建設された札幌の洋館を描いた。札幌や東京を中心に個展を多数開催したほか、テレビ番組等ではしばしば画業が紹介された。1996年没(享年81歳)。

特徴

夕暮れ時、あたりが仄暗くなる中、北海道庁赤れんが庁舎が背後から西日に照らされている。その姿は、ハスが浮かぶ池の水面におぼろげに映る。画面全体を支配する淡い青や紫が、風情を醸し出している。

伊藤は、「赤煉瓦の画家」の異名をもつほど、赤れんが庁舎を様々なバリエーションで描いた。青空と赤煉瓦の鮮やかな対比が際立つ作品や、雪によって全体がかすんだ作品などが知られているが、本作では、陽が沈む間際のかすかな残光が捉えられている。1967年渡欧時の印象派研究の成果が、余すところなく発揮されていると言える。当館ではすでに5点の伊藤の油彩作品を収蔵しているが、画家の代名詞である赤れんが庁舎を描いた油彩作品の収蔵は本作が初めてである。

また、25点収蔵している銅版画作品のうち1点(1979年作)には、赤れんが庁舎が描かれているが、前景に池を配している点で本作と構図が酷似する。銅版画では建物細部の正確さが追究されているのに対して、本作では建物や池に反射した光が繊りなす、微妙な色彩が再現されている。画家の巧みな技法の使い分けを見て取ることができる。

作家名	いとうただし	作品名	よんくのかわべ		
	伊藤正		四区の壁		
	ITO, Tadashi				
生没年	1915-1989	作品名 補足			
出生地	朝鮮忠清南道扶餘郡	制作年	1962年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	91.0×72.7cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和5年度	号数	F30	評価額	700,000 円

作家略歴

1915年、朝鮮忠清南道扶餘郡生まれ。父、俊磨は朝鮮総督府の雇員で主に通訳を担当。一家が日本に引き揚げてからは札幌に住む。札幌師範付属小学校卒業、札幌師範本科第一部卒業。卒業後陸軍第7師団の歩兵二等兵として入営(5ヶ月間)。その後、勤務義務が課せられ師範学校の指定する小・中学校に勤務。1941年、東京高等師範学校美術研究科卒業。在学中、新文展の佐竹徳(徳次郎)に私淑。札幌に戻り高校や短大に勤務し後進の指導に当たる。1941年、道展初出品で長官賞受賞。道展会員(1971年退会)、中央画壇では日展、一水会会員。戦後の道展再建に尽力した。伊藤正はデッサンの人といわれる。およそ50年の画業では、一貫して写実に徹し家族の肖像や身近な風景、札幌街角、農場、1962年と1970年、フランス滞在中にフランスの教会や街角の風景画を描いた。1989年没(享年73歳)。

特徴

本作は、1962年に妻とともに1年間パリ滞在中に描いた作品。パリ4区は、パリのほぼ中央、1区の東に位置しており、セーヌ川の北岸に面している。そこにある建物の壁を描いた。伊藤は、「古いパリの壁、壁、壁…その他のものは目に入らなかった。」(1971年伊藤正パリ展)にあるように、憧れのユトリロや佐伯祐三、荻須高德の描いたパリ街角の作品を多数制作した。伊藤の作品の特徴である、緊張感のある黒い直線を強調した画面構成が本作にも表れている。

作家名	とみたゆきえ	作品名	かぜのとりで(1)		
	富田幸衛		風の砦(1)		
	TOMITA, Yukie				
生没年	1932-2022	作品名 補足			
出生地	北海道札幌市	制作年	2001年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	97.0×130.4cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和5年度	号数	F60	評価額	600,000 円

作家略歴

1932年、北海道札幌市生まれ。1949年、国鉄札幌鉄道教習所中等部土木課卒業。1950年より日本国有鉄道にて勤務。同年より画家・伊藤仁に師事し、油彩画を学ぶ。戦前のプロレタリア美術の代表的な画家として知られる大月源二が1952年に結成した北海道生活派美術集団に1956年より出品。伊藤仁の推薦で同人となり、1970年の最終回まで毎回出品。1974年、北海道平和美術展の創設に携わる。2006年、北海道九条美術の会の設立に参加、代表世話人。作品制作のほか、執筆活動にも精力的に取り組み、2003年『微光のソノリテ—画家・伊藤仁の作品世界』出版、2006年『社会史の中の美術家たち 北海道における民主的美術運動再考 1945-2005』出版。2022年没(享年91歳)。

特徴

「風の砦」シリーズの一作。本シリーズは北海道小樽市朝里で描いた複数のスケッチをもとに制作された。画面中央には、木製の防風柵に囲まれた家屋が建ち並び、前景には浮具や漁網などの漁で用いられる道具が配されている。富田は縦軸と横軸を意識した堅牢な画面構成を得意とする。本作では複数の細長い板を組み合わせた防風柵がとりわけ縦軸を強調し、仰ぎ見る視点と相まって、防風柵がそびえる堅牢なさまを効果的に表現している。冬の漁村は、画家が継続して取り組んだモチーフの一つである。本作以前に制作された《防雪柵のある漁村》(1970年)や《冬ごもり》(1981年)などと比較すると、風景の一部となった防風柵ではなく、厳しい冬に耐え抜く「砦」としての防風柵が象徴的に表されていると言えるだろう。当館における同作家の作品の収蔵は本年度が初となる。

作家名	とみたゆきえ	作品名	かぜのとりで(2)		
	富田幸衛		風の砦(2)		
	TOMITA, Yukie				
生没年	1932-2022	作品名 補足			
出生地	北海道札幌市	制作年	2001年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	97.2×130.2cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和5年度	号数	F60	評価額	600,000 円

作家略歴

1932年、北海道札幌市生まれ。1949年、国鉄札幌鉄道教習所中等部土木課卒業。1950年より日本国有鉄道にて勤務。同年より画家・伊藤仁に師事し、油彩画を学ぶ。戦前のプロレタリア美術の代表的な画家として知られる大月源二が1952年に結成した北海道生活派美術集団に1956年より出品。伊藤仁の推薦で同人となり、1970年の最終回まで毎回出品。1974年、北海道平和美術展の創設に携わる。2006年、北海道九条美術の会の設立に参加、代表世話人。作品制作のほか、執筆活動にも精力的に取り組み、2003年『微光のソノリテ—画家・伊藤仁の作品世界』出版、2006年『社会史の中の美術家たち 北海道における民主的美術運動再考 1945-2005』出版。2022年没(享年91歳)。

特徴

「風の砦」シリーズの一作。本シリーズは北海道小樽市朝里で描いた複数のスケッチをもとに制作された。本作ではシリーズ1作目《風の砦(1)》で全面に描かれた防風柵のある家屋は背景となり、積み重なる無数の消波ブロックが画面の大部分を占めている。前景にモチーフを集積させ、後景に建物や高さのある構造物を配置する表現はのちの「裸形のランドスケープ」シリーズにも見られ、本作にその萌芽を見ることができるだろう。当館における同作家の作品の収蔵は本年度が初となる。

作家名	とみたゆきえ	作品名	こおるうみ(B)		
	富田幸衛		凍る海(B)		
	TOMITA, Yukie				
生没年	1932-2022	作品名 補足			
出生地	北海道札幌市	制作年	2005 年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	112.0×130.5cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和 5 年度	号数	変形 60 号	評価額	600,000 円

作家略歴

1932 年、北海道札幌市生まれ。1949 年、国鉄札幌鉄道教習所中等部土木課卒業。1950 年より日本国有鉄道にて勤務。同年より画家・伊藤仁に師事し、油彩画を学ぶ。戦前のプロレタリア美術の代表的な画家として知られる大月源二が 1952 年に結成した北海道生活派美術集団に 1956 年より出品。伊藤仁の推薦で同人となり、1970 年の最終回まで毎回出品。1974 年、北海道平和美術展の創設に携わる。2006 年、北海道九条美術の会の設立に参加、代表世話人。作品制作のほか、執筆活動にも精力的に取り組み、2003 年『微光のソノリテ—画家・伊藤仁の作品世界』出版、2006 年『社会史の中の美術家たち 北海道における民主的美術運動再考 1945-2005』出版。2022 年没(享年 91 歳)。

特徴

凍った海に二隻の船が停泊している。冬のあいだ漁に出ることのない船には漁網や釣り竿が立てかけられ、オフシーズンを迎えた漁村の様子が見て取れる。垂れ下がる漁網と硬質な釣り竿、降り積もった雪など、それぞれの質感が丁寧に描き分けられており、画家の技量の高さがうかがえる。同年に制作された《凍る海(A)》においても、明るくやわらかな色調で同様のモチーフを描いており、本シリーズは北海道の冬の厳しさよりも、命が芽吹く春の訪れを待つ穏やかな空気を表現している。当館における同作家の作品の収蔵は本年度が初となる。

作家名	ふかほりりゅうすけ	作品名	せっちゅうか	
	深堀隆介		雪中歌	
	FUKAHORI, Riusuke			
生没年	1973-			
出生地	愛知県名古屋市	作品名 補足		
No Image		制作年	2023 年	
		技法 材質	アクリル絵具、紙	
		寸法	180.0×270.0cm	
取得方法	寄贈	エディション		
選定年度	令和5年度	号数	評価額	3,600,000 円

作家略歴

1973年愛知県生まれ、1995年愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸専攻学科卒業。制作に行き詰まりアーティストを辞めようとした時、部屋で7年間粗末に飼っていた一匹の金魚に初めて魅了され、金魚を描きはじめる。エポキシ樹脂とアクリル絵具を幾重にも積層して描く独自の超絶技巧「2.5D ペインティング」によって国内外で高い評価を受けている。2018年「深堀隆介展 平成しんちゅう屋」(平塚市美術館ほか全国巡回)、2021年「深堀隆介展 金魚鉢、地球鉢」(長崎県美術館 県民ギャラリーほか全国巡回)、2023年「深堀隆介展 水面のゆらぎの中へ」(札幌芸術の森美術館ほか全国巡回)。

特徴

2023年9月16日に札幌芸術の森アートホール・アリーナで開催されたライブペインティングによって描かれた作品。深堀は平面作品を描く際、去来する情景や思い浮かんだモチーフを鱗の下に描きこむことがあるという。本作も同様の手法によって描かれており、向かって右側の金魚の胴体には羊ヶ丘のクラーク博士像、スープカレー、左側の金魚の胴体には回転寿司、北海道の地形、ジンギスカン、ヒグマ、流氷などが隠れている。来場者との対話を交え、札幌滞在中の思い出を語りながら描画し、仕上げに大筆で画面に雪を舞わせ、約1時間40分で完成した。赤い斑点を帯びた二匹の白い金魚が寄り添うように画面を漂い、翻る尾びれは軽やかさと繊細さを物語っている。限られた時間内で描くライブペインティングの作品でありながら、なまめかしさや詩情といった深堀の平面作品の本質が表れた作と言える。

作家名	やぎのぶこ	作品名	とけいだいふきん		
	八木伸子		時計台附近		
	YAGI, Nobuko				
生没年	1925-2012	作品名 補足			
出生地	札幌市	制作年	1950 年頃		
No Image		技法 材質	油彩、キャンバス		
		寸法	52.5×45.5cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和5年度	エディション			
		号数	F10	評価額	250,000 円

作家略歴

1925年、札幌市生まれ。母は書家の松本春子。女子美術専門学校(現女子美術大学)への進学を志すも身体が弱いため断念し、北海道庁立札幌高等女学校(現札幌北高等学校)に入学。1944年、同校家事裁縫専攻科を卒業する。1945年には札幌に疎開中の三雲祥之助、小川マリ夫妻に師事。翌年には中根光一郎で開かれていた「札幌洋画研究所」に通い、小西(岸)葉子らとともに学ぶ。講師には三雲祥之助、松島正幸、田中忠雄らが出た。

1952年に画家の八木保次と結婚し、上京。50年代中頃から、フライパンや食器など台所にある身近なものを平面的に構成した油彩画を制作。50年代末から数年にわたり抽象的作品を描いた後、1971年にはパリに5ヵ月間滞在。帰国後、室内や雪景色などを題材に、清涼感ある淡い色調を特徴とした厚塗りの作風へ移行。1977年には生活の拠点を札幌へ移した。生涯を通じて、春陽会展、女流画家協会展、全道展を主な発表の場とした。

1999年、札幌芸術の森美術館にて「八木保次・伸子展」を開催。2000年、札幌市民芸術賞を受賞。2012年、逝去。その一ヵ月後、先に病に伏していた夫保次も後を追うように逝去した。

特徴

当館では1999年に「八木保次・伸子展」を開催し、現在26点の八木伸子作品を収蔵している。油彩画で最も古いものは1949年作の《卓上の静物》、素描では1945年作の《20歳の自画像》、1947年作の《裸婦》を収蔵しているが、本作はこれらと同時期の初期作品となる。この時期の八木は、1945年より師事した三雲祥之助・小川マリ夫妻の「物と物との関係を見る」という教えを受け、静物画や室内画を中心に制作していたが、本作は札幌時計台付近の風景を描いている。前景に描かれた道とそこから垂直方向に伸びる木々、画面奥に時計台を捉える遠近感のある構図のなか、建物や道は形態・色彩双方が簡略化されて描かれる。この後、1950年代中頃には、台所の静物を平面的に構成した特徴的な作風を中心とするが、本作はその前段階のものとなる。師の教えを受け、物そのものではなくその構成によって画面を形作っていく指向が見て取れる。同時期の静物画にも同様の傾向が表れており、画家の初期の作例を特徴づける作品のひとつといえる。

作家名	かたおかたまこ	作品名	ふじ		
	片岡球子		富士		
	KATAOKA, Tamako				
生没年	1905-2008	作品名 補足			
出生地	札幌市	制作年	1981 年		
No Image		技法 材質	リトグラフ、紙		
		寸法	42.5×55.0cm		
		取得方法	寄贈	エディション	E.A
選定年度	令和5年度	号数		評価額	200,000 円

作家略歴

北海道札幌区(現札幌市)に生まれる。生家は醸造業で成功を収めていた。北海道庁立札幌高等女学校(現札幌北高等学校)補修課師範部を卒業後、上京し女子美術専門学校(現女子美術大学)日本画科高等科に入学。卒業後は横浜の小学校で小学校教諭をつとめながら画業に励むが、帝展、院展では落選が続いた。しかし不断の努力で独自の表現を磨き上げ、1952年には日本美術院同人に推挙。以降、院展をおもな舞台に活躍し、その鮮やかな色遣い、大胆な構図、絵の具の厚塗りといった強烈な個性は戦後の日本画壇に新風を吹き込み、歴史上の人物を題材にした「面構」シリーズで画家としての評価を不動のものとした。1982年には日本芸術院会員となり、1986年には文化功労者に選ばれる。1989年、文化勲章を受章。2008年1月、神奈川県藤沢市内の病院にて103歳で死去。2010年、札幌芸術の森美術館で「片岡球子展」を開催。

特徴

日本画では戦前より人物等を中心に描いてきた片岡だが、1960年代から風景、特に火山を主題として描いた作例が出始め、70年代以後は富士山を中心とする。日本の伝統芸能や歴史上の人物、裸婦など作家を代表するシリーズが複数あるが、富士山もまた数多描かれ、そうしたシリーズのひとつとして形成された。画家は「わたしは、前かけのポケットなんか突っ込んでおいて、いつでも取り出して眺められるような、そんな親しみのある富士山を描きたいと思っています」と語り、力強く輝きを放ちその生命を謳歌するかのような数々の富士が描かれている。版画については1964年59歳のときから始められた。それは本画の複製としてではなく、石版石に直接描く、歴とした版画作品としてであり、以降没するまで制作は続けられる。日本画と同様に、70年代より富士を画題の中心としはじめ、以降版画作品の大部分を富士が占めることとなる。本作はそのなかの一つ。太く明瞭な輪郭線で象られた富士と山々の稜線、それぞれの山の黄・ピンク・青緑といった鮮烈な色彩の対比が特徴的な作品である。

作家名	よもぎざわ しょうこ	作品名	びょうとうにつき12-25		
	艾沢 詳子		病棟日記 12-25		
	YOMOGIZAWA, Shoko				
生没年	1949-	作品名 補足			
出生地	北海道夕張郡由仁町	制作年	1985 年		
No Image		技法 材質	銅版画、紙(BFK リーブ)		
		寸法	37.0×25.3cm		
取得方法	寄贈	エディション	6/20		
選定年度	令和 5 年度	号数		評価額	18,000 円

作家略歴

1949年、北海道夕張郡由仁町生まれ。1970年代より銅版画家として活動を開始。二度の渡米を経て、支持体に糸や紙などを貼りつけ凹凸のある版をつくりプリントする技法(コラグラフ)や、石膏や溶かした紙を用いた型取りに取り組むなど、従来の版画のあり方にとらわれない版の拡張ともいえる挑戦を続ける。やがて、それらは古紙やティッシュペーパーをロウで固めた人型のオブジェを無数に配置するインスタレーションの制作へと結実。近年では異分野の専門家と協働しアートとテクノロジーが融合する作品制作に精力的に取り組む。これまで「版の沸騰」(INAX ギャラリー、1997年)、「夏のオライオン」(有島武郎旧邸、2004年)、「交差する視点とかたち VOL.5」(札幌芸術の森美術館、北海道立釧路芸術館、2012年)、「Paper Trail—イメージの回廊へ」(苫小牧市美術博物館、2018年)などの個展・グループ展や、国際展にも積極的に参加(バーラト・バヴァン国際版画ビエンナーレ、グランプリ、2000年他多数)。2014年、北海道文化奨励賞受賞。2023年、札幌芸術賞受賞。

特徴

1974年頃から艾沢は版画家・渋谷栄一に私淑し、銅版画からそのキャリアを開始する。1975年頃からは全道展、1979年頃からは春陽展へ出品を重ね、1970年代から1980年代半ばにかけて音楽や人物をモチーフとしたノスタルジックな具象的作品を制作していた。本作はそれまでの作風が変化する転機となった作品群「病棟日記」(1980年代後半に制作)シリーズに該当する。待合室で順番を待つ人、ベッドでまどろむ姿、リハビリの様子など、画面には病棟のくり返される日々が収められている。父の闘病、そして死という私的な体験を版におこすにあたり、艾沢は下絵となるイメージドローイングから版をつくるという従来の手順を踏まず、銅板に直接描画するという手法をとった。版を通して次々に生まれるイメージは、心象風景のようでもある。そこに表出するのは作家の記憶の断片であり、時間の経過とともに薄れてしまう感覚や印象を純化した、その時の「現実から掴み取った感触」(艾沢詳子「創作上の試行錯誤」『春陽』第58号、春陽会、1989年、14頁)である。

作家名	よもぎざわ しょうこ	作品名	Waiting room XI		
	艾沢 詳子		Waiting room XI		
	YOMOGIZAWA, Shoko				
生没年	1949-	作品名 補足			
出生地	北海道夕張郡由仁町	制作年	1987年(2022年に刷り直し)		
No Image		技法 材質	銅版画、紙(BFK リーブ)		
		寸法	57.5×76.0cm		
取得方法	寄贈	エディション	EP		
選定年度	令和5年度	号数		評価額	90,000 円

作家略歴

1949年、北海道夕張郡由仁町生まれ。1970年代より銅版画家として活動を開始。二度の渡米を経て、支持体に糸や紙などを貼りつけ凹凸のある版をつくりプリントする技法(コラグラフ)や、石膏や溶かした紙を用いた型取りに取り組むなど、従来の版画のあり方にとらわれない版の拡張ともいえる挑戦を続ける。やがて、それらは古紙やティッシュペーパーをロウで固めた人型のオブジェを無数に配置するインスタレーションの制作へと結実。近年では異分野の専門家と協働しアートとテクノロジーが融合する作品制作に精力的に取り組む。これまで「版の沸騰」(INAX ギャラリー、1997年)、「夏のオライオン」(有島武郎旧邸、2004年)、「交差する視点とかたち VOL.5」(札幌芸術の森美術館、北海道立釧路芸術館、2012年)、「Paper Trail—イメージの回廊へ」(苫小牧市美術博物館、2018年)などの個展・グループ展や、国際展にも積極的に参加(バーラト・バヴァン国際版画ビエンナーレ、グランプリ、2000年他多数)。2014年、北海道文化奨励賞受賞。2023年、札幌芸術賞受賞。

特徴

1974年頃から艾沢は版画家・渋谷栄一に私淑し、銅版画からそのキャリアを開始する。1975年頃からは全道展、1979年頃からは春陽展へ出品を重ね、1970年代から1980年代半ばにかけて音楽や人物をモチーフとしたノスタルジックな具象的作品を制作していた。本作はそれまでの作風が変化する転機となった作品群「病棟日記」(1980年代後半に制作)シリーズに該当する。待合室で順番を待つ人、ベッドでまどろむ姿、リハビリの様子など、画面には病棟のくり返される日々が収められている。父の闘病、そして死という私的な体験を版におこすにあたり、艾沢は下絵となるイメージドローイングから版をつくるという従来の手順を踏まず、銅板に直接描画するという手法をとった。版を通して次々に生まれるイメージは、心象風景のようでもある。そこに表出するのは作家の記憶の断片であり、時間の経過とともに薄れてしまう感覚や印象を純化した、その時の「現実から掴み取った感触」(艾沢詳子「創作上の試行錯誤」『春陽』第58号、春陽会、1989年、14頁)である。

作家名	よもぎざわ しょうこ	作品名	Knock knock knock! (I am waiting)		
	艾沢 詳子		Knock knock knock! (I am waiting)		
	YOMOGIZAWA, Shoko				
生没年	1949-	作品名 補足			
出生地	北海道夕張郡由仁町	制作年	1989 年		
No Image		技法 材質	銅版画、紙(BFK リーブ)		
		寸法	105.3×72.2cm		
取得方法	寄贈	エディション	2/15		
選定年度	令和5年度	号数		評価額	135,000 円

作家略歴

1949年、北海道夕張郡由仁町生まれ。1970年代より銅版画家として活動を開始。二度の渡米を経て、支持体に糸や紙などを貼りつけ凹凸のある版をつくりプリントする技法(コラグラフ)や、石膏や溶かした紙を用いた型取りに取り組むなど、従来の版画のあり方にとらわれない版の拡張ともいえる挑戦を続ける。やがて、それらは古紙やティッシュペーパーをロウで固めた人型のオブジェを無数に配置するインスタレーションの制作へと結実。近年では異分野の専門家と協働しアートとテクノロジーが融合する作品制作に精力的に取り組む。これまで「版の沸騰」(INAX ギャラリー、1997年)、「夏のオライオン」(有島武郎旧邸、2004年)、「交差する視点とかたち VOL.5」(札幌芸術の森美術館、北海道立釧路芸術館、2012年)、「Paper Trail—イメージの回廊へ」(苫小牧市美術博物館、2018年)などの個展・グループ展や、国際展にも積極的に参加(バーラト・バヴァン国際版画ビエンナーレ、グランプリ、2000年他多数)。2014年、北海道文化奨励賞受賞。2023年、札幌芸術賞受賞。

特徴

1980年代から1990年代初頭は、交流という面でも作家の形成において重要な時期にあたる。写真家・安齊重男と出会ったのもこの頃であり、1983年の川俣正によるインスタレーション「TETRA HOUSE 326 PROJECT」の撮影のために来札した安齊が、艾沢が営んでいた喫茶店を訪れたことをきっかけに知己を得る。その後、1989年にテンポラリースペースが企画したアートイベント「界川游行」に帯同した安齊と再会し、アトリエを訪問するなど交流を深めるようになった。1989年に制作された本作は、安齊がアトリエを訪れたときの印象をもとに制作された。艾沢は「ある訪問者によってその人生が変わる」という言葉を同作に寄せている(艾沢 詳子「作家の発言—五感の刻印」『版画藝術』77号、阿部出版、1992年、200頁)。

作家名	よもぎざわ しょうこ	作品名	Message of wind (By message of Ryoji Koie 25 Exhibition)		
	艾沢 詳子		Message of wind (By message of Ryoji Koie 25 Exhibition)		
	YOMOGIZAWA, Shoko				
生没年	1949-	作品名 補足			
出生地	北海道夕張郡由仁町	制作年	1990 年		
No Image		技法 材質	銅版画、紙(ハーネミューレ)		
		寸法	106.4×78.0cm		
取得方法	寄贈	エディション	EP		
選定年度	令和5年度	号数		評価額	135,000 円

作家略歴

1949年、北海道夕張郡由仁町生まれ。1970年代より銅版画家として活動を開始。二度の渡米を経て、支持体に糸や紙などを貼りつけ凹凸のある版をつくりプリントする技法(コラグラフ)や、石膏や溶かした紙を用いた型取りに取り組むなど、従来の版画のあり方にとらわれない版の拡張ともいえる挑戦を続ける。やがて、それらは古紙やティッシュペーパーをロウで固めた人型のオブジェを無数に配置するインスタレーションの制作へと結実。近年では異分野の専門家と協働しアートとテクノロジーが融合する作品制作に精力的に取り組む。これまで「版の沸騰」(INAX ギャラリー、1997年)、「夏のオライオン」(有島武郎旧邸、2004年)、「交差する視点とかたち VOL.5」(札幌芸術の森美術館、北海道立釧路芸術館、2012年)、「Paper Trail—イメージの回廊へ」(苫小牧市美術博物館、2018年)などの個展・グループ展や、国際展にも積極的に参加(バーラト・バヴァン国際版画ビエンナーレ、グランプリ、2000年他多数)。2014年、北海道文化奨励賞受賞。2023年、札幌芸術賞受賞。

特徴

1990年、艾沢は泊村で見た風景に触発され《Wind of Tomari I》《Wind of Tomari II》《Wind of Tomari III》を制作する。風が吹きわたる村はどこまでも穏やかな景色が広がっていたが、その実、1989年6月から運転を開始した泊原発が所在していた。眼前の平穏な風景と、ひとたび事故が起きれば大惨事になりかねない原発に対して作家が抱いた切迫感とのギャップを、艾沢はこの時期に度々用いていたモチーフである樹木を介して表現している。本作も「Wind of Tomari」シリーズと同年に制作され、「プリントアドベンチャー'90」展(1990年10月25日-11月4日、北海道立近代美術館/札幌)に共に出品されており、同じ系譜に位置づけられる。また、本作は陶芸家・鯉江良二の反核を訴えた作品群《チェルノブイリ・シリーズ》(1989-1990年)へのオマージュでもある。

作家名	よもぎざわ しょうこ	作品名	Weathering XIV		
	艾沢 詳子		Weathering XIV		
	YOMOGIZAWA, Shoko				
生没年	1949-	作品名 補足			
出生地	北海道夕張郡由仁町	制作年	1990 年		
No Image		技法 材質	銅版画、紙(BFK リーブ)、椗		
		寸法	61.0×80.0cm		
取得方法	寄贈	エディション	AP		
選定年度	令和 5 年度	号数		評価額	100,000 円

作家略歴

1949 年、北海道夕張郡由仁町生まれ。1970 年代より銅版画家として活動を開始。二度の渡米を経て、支持体に糸や紙などを貼りつけ凹凸のある版をつくりプリントする技法(コラグラフ)や、石膏や溶かした紙を用いた型取りに取り組むなど、従来の版画のあり方にとられない版の拡張ともいえる挑戦を続ける。やがて、それらは古紙やティッシュペーパーをロウで固めた人型のオブジェを無数に配置するインスタレーションの制作へと結実。近年では異分野の専門家と協働しアートとテクノロジーが融合する作品制作に精力的に取り組む。これまで「版の沸騰」(INAX ギャラリー、1997 年)、「夏のオライオン」(有島武郎旧邸、2004 年)、「交差する視点とかたち VOL.5」(札幌芸術の森美術館、北海道立釧路芸術館、2012 年)、「Paper Trail—イメージの回廊へ」(苫小牧市美術博物館、2018 年)などの個展・グループ展や、国際展にも積極的に参加(バーラト・バヴァン国際版画ビエンナーレ、グランプリ、2000 年他多数)。2014 年、北海道文化奨励賞受賞。2023 年、札幌芸術賞受賞。

特徴

1980 年代後半に集中的に取り組んだ「病棟日記」の後に取り組んだ「Weathering (風化)」シリーズは、風葬を着想源とする。大地に横たわる肉体が風雨にさらされ、やがて土に還る。究極的な生命の循環ともいえる埋葬をイメージの源泉としつつも、作品からは悲惨さや無常観は窺えない。そこに顕現するのは、あらゆるものを削ぎ落した末に残る核であり、風化を経た先の再生の予感である。「Weathering」シリーズのイメージはやがて「Woods」、「種」といった作品群へ収斂していく。本作の背景の木目は、廃材の椗を版に利用して刷られたものである。なお、「Weathering」シリーズについては、《Weathering V》(1990 年作)と、舞踊家・大野一雄の身体表現をイメージ源とする作品《Weathering(O 氏へ)》(1991 年作)・《Weathering(O 氏 I)》(1991 年作)を北海道立近代美術館が既に収蔵している。

作家名	よもぎざわ しょうこ	作品名	King of wood		
	艾沢 詳子		King of wood		
	YOMOGIZAWA, Shoko				
生没年	1949-	作品名 補足			
出生地	北海道夕張郡由仁町	制作年	1991 年		
No Image		技法 材質	銅版画、紙(ロサスピーナ)		
		寸法	99.6×70.3cm		
		取得方法	寄贈	エディション	3/30
選定年度	令和5年度	号数		評価額	135,000 円

作家略歴

1949年、北海道夕張郡由仁町生まれ。1970年代より銅版画家として活動を開始。二度の渡米を経て、支持体に糸や紙などを貼りつけ凹凸のある版をつくりプリントする技法(コラグラフ)や、石膏や溶かした紙を用いた型取りに取り組むなど、従来の版画のあり方にとらわれない版の拡張ともいえる挑戦を続ける。やがて、それらは古紙やティッシュペーパーをロウで固めた人型のオブジェを無数に配置するインスタレーションの制作へと結実。近年では異分野の専門家と協働しアートとテクノロジーが融合する作品制作に精力的に取り組む。これまで「版の沸騰」(INAX ギャラリー、1997年)、「夏のオライオン」(有島武郎旧邸、2004年)、「交差する視点とかたち VOL.5」(札幌芸術の森美術館、北海道立釧路芸術館、2012年)、「Paper Trail—イメージの回廊へ」(苫小牧市美術博物館、2018年)などの個展・グループ展や、国際展にも積極的に参加(バーラト・バヴァン国際版画ビエンナーレ、グランプリ、2000年他多数)。2014年、北海道文化奨励賞受賞。2023年、札幌芸術賞受賞。

特徴

「Woods」シリーズに登場する樹木のイメージは、闘病中の父が語ったエピソードに由来する。林業に従事していた父は、伐採後の切り株や根を掘り出し売買していたという。病床の父が、若かりし頃の山での記憶を楽しげに語るのを聞きながら、知らなかった父の人生のある側面、父が見た森の景色が鮮烈な印象となって艾沢のなかに残った。死、そして風化を経た先に現れた樹々は、脈々と流れる命を樹皮の内側に蓄えた再生を象徴するモチーフである。なお、本シリーズについては北海道立近代美術館が《Woods I》(1991年作)を収蔵している。

作家名	よもぎざわ しょうこ	作品名	Queen of wood		
	艾沢 詳子		Queen of wood		
	YOMOGIZAWA, Shoko				
生没年	1949-	作品名 補足			
出生地	北海道夕張郡由仁町	制作年	1991 年		
No Image		技法 材質	銅版画、紙(ロサスピーナ)		
		寸法	99.5×70.3cm		
取得方法	寄贈	エディション	3/30		
選定年度	令和5年度	号数	評価額	135,000	円

作家略歴

1949年、北海道夕張郡由仁町生まれ。1970年代より銅版画家として活動を開始。二度の渡米を経て、支持体に糸や紙などを貼りつけ凹凸のある版をつくりプリントする技法(コラグラフ)や、石膏や溶かした紙を用いた型取りに取り組むなど、従来の版画のあり方にとらわれない版の拡張ともいえる挑戦を続ける。やがて、それらは古紙やティッシュペーパーをロウで固めた人型のオブジェを無数に配置するインスタレーションの制作へと結実。近年では異分野の専門家と協働しアートとテクノロジーが融合する作品制作に精力的に取り組む。これまで「版の沸騰」(INAX ギャラリー、1997年)、「夏のオライオン」(有島武郎旧邸、2004年)、「交差する視点とかたち VOL.5」(札幌芸術の森美術館、北海道立釧路芸術館、2012年)、「Paper Trail—イメージの回廊へ」(苫小牧市美術博物館、2018年)などの個展・グループ展や、国際展にも積極的に参加(バーラト・バヴァン国際版画ビエンナーレ、グランプリ、2000年他多数)。2014年、北海道文化奨励賞受賞。2023年、札幌芸術賞受賞。

特徴

「Woods」シリーズに登場する樹木のイメージは、闘病中の父が語ったエピソードに由来する。林業に従事していた父は、伐採後の切り株や根を掘り出し売買していたという。病床の父が、若かりし頃の山での記憶を楽しげに語るのを聞きながら、知らなかった父の人生のある側面、父が見た森の景色が鮮烈な印象となって艾沢のなかに残った。死、そして風化を経た先に現れた樹々は、脈々と流れる命を樹皮の内側に蓄えた再生を象徴するモチーフである。なお、本シリーズについては北海道立近代美術館が《Woods I》(1991年作)を収蔵している。

作家名	よもぎざわ しょうこ	作品名	020798		
	艾沢 詳子		020798		
	YOMOGIZAWA, Shoko				
生没年	1949-	作品名 補足			
出生地	北海道夕張郡由仁町	制作年	1998 年		
No Image		技法 材質	コラグラフ、紙(BFK リーブ)		
		寸法	121.5×80.0cm		
		取得方法	寄贈	エディション	AP
選定年度	令和 5 年度	号数		評価額	180,000 円

作家略歴

1949年、北海道夕張郡由仁町生まれ。1970年代より銅版画家として活動を開始。二度の渡米を経て、支持体に糸や紙などを貼りつけ凹凸のある版をつくりプリントする技法(コラグラフ)や、石膏や溶かした紙を用いた型取りに取り組むなど、従来の版画のあり方にとられない版の拡張ともいえる挑戦を続ける。やがて、それらは古紙やティッシュペーパーをロウで固めた人型のオブジェを無数に配置するインスタレーションの制作へと結実。近年では異分野の専門家と協働しアートとテクノロジーが融合する作品制作に精力的に取り組む。これまで「版の沸騰」(INAX ギャラリー、1997年)、「夏のオライオン」(有島武郎旧邸、2004年)、「交差する視点とかたち VOL.5」(札幌芸術の森美術館、北海道立釧路芸術館、2012年)、「Paper Trail—イメージの回廊へ」(苫小牧市美術博物館、2018年)などの個展・グループ展や、国際展にも積極的に参加(バーラト・バヴァン国際版画ビエンナーレ、グランプリ、2000年他多数)。2014年、北海道文化奨励賞受賞。2023年、札幌芸術賞受賞。

特徴

1995年の渡米時に、版画家リサ・マッキーによる講座に参加したのを契機に、艾沢はコラグラフに本格的に取り組むようになった。艾沢は一般的なコラグラフによる制作と比較し、長い時間をかけて版を作り込む。特性をふまえて素材を制御し、時に偶然に任せながら、版の細部まで緻密に手をかけることで独自の版を追求している。艾沢の版画制作は素材となる物質を手で触ることから始まり、その指の感触に刺激されて制作にはずみがつくという。指の感触に導かれながら生み出された版は、素材の重なりによってレリーフのような立体性を持ち、触覚を刺激する独特の風合いを帯びている。

作家名	よもぎざわ しょうこ	作品名	101608		
	艾沢 詳子		101608		
	YOMOGIZAWA, Shoko				
生没年	1949-	作品名 補足			
出生地	北海道夕張郡由仁町	制作年	2008 年		
No Image		技法 材質	コラグラフ、紙(BFK リーブ)		
		寸法	180.7×244.3cm [3 点]		
		取得方法	寄贈	エディション	AP
選定年度	令和 5 年度	号数		評価額	580,000 円

作家略歴

1949 年、北海道夕張郡由仁町生まれ。1970 年代より銅版画家として活動を開始。二度の渡米を経て、支持体に糸や紙などを貼りつけ凹凸のある版をつくりプリントする技法(コラグラフ)や、石膏や溶かした紙を用いた型取りに取り組むなど、従来の版画のあり方にとらわれない版の拡張ともいえる挑戦を続ける。やがて、それらは古紙やティッシュペーパーをロウで固めた人型のオブジェを無数に配置するインスタレーションの制作へと結実。近年では異分野の専門家と協働しアートとテクノロジーが融合する作品制作に精力的に取り組む。これまで「版の沸騰」(INAX ギャラリー、1997 年)、「夏のオライオン」(有島武郎旧邸、2004 年)、「交差する視点とかたち VOL.5」(札幌芸術の森美術館、北海道立釧路芸術館、2012 年)、「Paper Trail—イメージの回廊へ」(苫小牧市美術博物館、2018 年)などの個展・グループ展や、国際展にも積極的に参加(バーラト・バヴァン国際版画ビエンナーレ、グランプリ、2000 年他多数)。2014 年、北海道文化奨励賞受賞。2023 年、札幌芸術賞受賞。

特徴

本作の画面下部には気泡のような白い輪がいくつも連なっている。これはモデリングペーストとマットメディウムを混合したペーストを版に置き、固まりきらないうちにふき取って凹凸を版に作り、凹凸版で刷ることで生み出されている。凹凸の深さによってインクの残り具合が異なるため、このようなグラデーションを伴う気泡が画面に刷られる。凹凸の最もくぼんだ部分(白い輪の内部)にはインクがたっぷりと残るため深い黒が画面に刷られ、最も突出した部分(白い輪の部分)はインクが拭き取られるため白っぽく刷られる。ただし、版の最も突出した部分の表層にも微細な凹凸があり、そこにインクが溜まるため、一見白く抜けて見える部分にも薄くインクが残り繊細な濃淡が生まれる。艾沢はモデリングペーストとマットメディウムの配合を調整し版の凹凸をコントロールすることにより、この濃淡を実現している。

作家名	わたなべのぶお	作品名	ばんぶつきょうせいのだいち		
	渡辺信夫		万物共生の大地		
	WATANABE, Nobuo				
生没年	1945-	作品名 補足			
出生地	東京都	制作年	1977 年		
No Image		技法 材質	ゼラチン・シルヴァー・プリント		
		寸法	15.2×20.3cm		
		取得方法	寄贈		
取得方法	寄贈	エディション	-		
選定年度	令和5年度	号数	評価額	25,000	円

作家略歴

1945年、東京生まれ。1967年、多摩美術大学芸術学園写真科で東松照明に学び、「JAZZ Live in Tokyo JAPAN」を手掛ける。その後、フリーランスのカメラマンとしてアラビア石油(株)からの依頼を受け、クエートの海底油田を取材撮影。1970年、大阪万国博覧会日本政府館にてクエートの写真を展示。1983年、日産自動車(株)「英文会社概要」撮影が第四回英文広報刊行物コンクール最優秀賞及び総合会長賞を受賞。1987年、第34回サンケイ児童出版文化賞。1993年より北海道に移住し、「万物共生の大地」をテーマとする撮影活動を開始。1994年「万物共生の大地」(東川町文化ギャラリー)、1995年「万物共生の大地」(ニコンサロン/東京)、2006年個展「時空曼歩」(紋別市博物館 市民ホール)、2009年「万物共生の大地・エロスタナトス」(東川町文化ギャラリー)、2020年「JAZZ Live in Tokyo」(Gallery Zen/東川町)、2022年「渡辺信夫写真展 JAZZ Live in Tokyo」(紋別市立博物館 市民ホール)ほか展覧会多数。第1回～第7回高校生国際交流写真フェスティバル審査員(2015～2021年)。

特徴

渡辺が自らのライフワークとして制作しているシリーズ「万物共生の大地」の中の一作。渡辺は白黒写真の長い歴史と記録性に敬意を払い、あえて白黒写真で表現している。本作は、画面の上下を半分に分かつように空と雪原が配置され、中心に屹立する一本の樹が静謐な空気を作り出している。また、白光大る月から枝葉、樹体、雪原に落ちる影へと広がっていく三角形の構図が画面の安定感を強めている。加えて、白黒写真のもたらす繊細なグラデーションが画面を満たす静寂をより深いものにしていく。安定感のある構図を用いて、北海道の静穏で雄大な自然風景を表現する渡辺の代表的な作例といえよう。

作家名	わたなべのぶお	作品名	ぼんぶつきょうせいのだいち		
	渡辺信夫		万物共生の大地		
	WATANABE, Nobuo				
生没年	1945-	作品名 補足			
出生地	東京都	制作年	2000年		
No Image		技法 材質	ゼラチン・シルヴァー・プリント		
		寸法	15.2×20.3cm		
		取得方法	寄贈		
取得方法	寄贈	エディション	-		
選定年度	令和5年度	号数	評価額	25,000	円

作家略歴

1945年、東京生まれ。1967年、多摩美術大学芸術学園写真科で東松照明に学び、「JAZZ Live in Tokyo JAPAN」を手掛ける。その後、フリーランスのカメラマンとしてアラビア石油(株)からの依頼を受け、クエートの海底油田を取材撮影。1970年、大阪万国博覧会日本政府館にてクエートの写真を展示。1983年、日産自動車(株)「英文会社概要」撮影が第四回英文広報刊行物コンクール最優秀賞及び総合会長賞を受賞。1987年、第34回サンケイ児童出版文化賞。1993年より北海道に移住し、「万物共生の大地」をテーマとする撮影活動を開始。1994年「万物共生の大地」(東川町文化ギャラリー)、1995年「万物共生の大地」(ニコンサロン/東京)、2006年個展「時空曼歩」(紋別市博物館 市民ホール)、2009年「万物共生の大地・エロスタナトス」(東川町文化ギャラリー)、2020年「JAZZ Live in Tokyo」(Gallery Zen/東川町)、2022年「渡辺信夫写真展 JAZZ Live in Tokyo」(紋別市立博物館 市民ホール)ほか展覧会多数。第1回～第7回高校生国際交流写真フェスティバル審査員(2015～2021年)。

特徴

渡辺が自らのライフワークとして制作しているシリーズ「万物共生の大地」の中の一作。渡辺は白黒写真の長い歴史と記録性に敬意を払い、あえて白黒写真で表現している。本作は、地平線に没する太陽が画面中央下部の樹に重なる一瞬を捉えた作品である。画面中央に大きく浮かび上がる月が鑑賞者の視線を集め、作品に堂々とした雰囲気を与えている。安定感のある構図を用いて、北海道の静穏で雄大な自然風景を表現する渡辺の代表的な作例といえよう。

作家名	わたなべのぶお	作品名	ぼんぶつきょうせいのだいち		
	渡辺信夫		万物共生の大地		
	WATANABE, Nobuo				
生没年	1945-	作品名 補足			
出生地	東京都	制作年	2023 年		
No Image		技法 材質	ゼラチン・シルヴァー・プリント		
		寸法	19.3×24.2cm		
		取得方法	寄贈		
取得方法	寄贈	エディション	-		
選定年度	令和 5 年度	号数	評価額	25,000	円

作家略歴

1945 年、東京生まれ。1967 年、多摩美術大学芸術学園写真科で東松照明に学び、「JAZZ Live in Tokyo JAPAN」を手掛ける。その後、フリーランスのカメラマンとしてアラビア石油(株)からの依頼を受け、クエートの海底油田を取材撮影。1970 年、大阪万国博覧会日本政府館にてクエートの写真を展示。1983 年、日産自動車(株)「英文会社概要」撮影が第四回英文広報刊行物コンクール最優秀賞及び総合会長賞を受賞。1987 年、第 34 回サンケイ児童出版文化賞。1993 年より北海道に移住し、「万物共生の大地」をテーマとする撮影活動を開始。1994 年「万物共生の大地」(東川町文化ギャラリー)、1995 年「万物共生の大地」(ニコンサロン/東京)、2006 年個展「時空曼歩」(紋別市博物館 市民ホール)、2009 年「万物共生の大地・エロスタナトス」(東川町文化ギャラリー)、2020 年「JAZZ Live in Tokyo」(Gallery Zen/東川町)、2022 年「渡辺信夫写真展 JAZZ Live in Tokyo」(紋別市立博物館 市民ホール)ほか展覧会多数。第 1 回～第 7 回高校生国際交流写真フェスティバル審査員(2015～2021 年)。

特徴

渡辺が自らのライフワークとして制作しているシリーズ「万物共生の大地」の中の一作。渡辺は白黒写真の長い歴史と記録性に敬意を払い、あえて白黒写真で表現している。本作は、雲の切れ間から光が漏れ、光の柱が地上に降り立っているように見える「薄明光線」と呼ばれる気象現象(「天使の梯子」と称されることもある)を捉えた作品である。画面中央に据えられた地平線が穏やかな印象をもたらすとともに、微細なグラデーションを帯びながら地上に降り注ぐ放射状の光に鑑賞者の視線が誘導される。安定感のある構図を用いて、北海道の静穏で雄大な自然風景を表現する渡辺の代表的な作例といえよう。

作家名	かみやまあきら	作品名	じかんのあいしかたーがっこうへいったひ		
	神山明		時間の愛し方ー学校へ行った日		
	KAMIYAMA, Akira				
生没年	1953-2012	作品名 補足			
出生地	東京都	制作年	1995 年		
No Image		技法 材質	杉、オイルステン		
		寸法	35.2×78.0×5.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和5年度	号数	評価額	200,000	円

作家略歴

1953年東京生まれ。東京藝術大学大学院デザインの基礎造形及び理論専攻修了。2000-2001年パリ国立高等装飾学校に学ぶ。1981年びわこ現代彫刻展入選、ヘンリー・ムア大賞展で佳作賞受賞。1984年、《たしかこのあたりだと思う》でエンバ賞美術コンクールで優秀賞受賞。本作が転機となり、オイルステンで仕上げた杉材の作品を制作する。1989年、サンパウロ・ビエンナーレに出品。制作の根元には、大学で学んだ図学の教えとデザイン思考があり、見えないところも緻密に作りこむ。作品制作にあたり、自分の頭の中を覗き込み、その中に積み重なっているものを拾い出し全体を作り上げていくと語っている。制作過程は、クロッキー帳で繰り返し考えたエスキースをもとに詳細な図面におこし、パーツを丁寧に仕上げる。1995年以降は、月や球体の立体物が影を潜め建物型の作品に移行する。2006年以降、紙を用いた立体やレリーフを制作した。2012年没(享年59歳)。

特徴

オイルステンで仕上げた杉材による繊細な構造のレリーフ。神山は、自分の頭の中を覗き込みながら、その中に積み重なっているものを拾い出し、全体を形づくり仕上げていく。計算された緻密な造形は、普遍的でどこか懐かしさを感じさせる。

作家名	かみやまあきら	作品名	ひやくねんのちえ		
	神山明		時間の愛し方—百年の知恵		
	KAMIYAMA, Akira				
生没年	1953-2012	作品名 補足			
出生地	東京都	制作年	1995 年		
No Image		技法 材質	杉、オイルステン		
		寸法	35.2×78.9×6.2cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和5年度	エディション			
		号数	評価額	200,000	円

作家略歴

1953年東京生まれ。東京藝術大学大学院デザインの基礎造形及び理論専攻修了。2000-2001年パリ国立高等装飾学校に学ぶ。1981年びわこ現代彫刻展入選、ヘンリー・ムア大賞展で佳作賞受賞。1984年、《たしかこのあたりだと思う》でエンバ賞美術コンクールで優秀賞受賞。本作が転機となり、オイルステンで仕上げた杉材の作品を制作する。1989年、サンパウロ・ビエンナーレに出品。制作の根元には、大学で学んだ図学の教えとデザイン思考があり、見えないところも緻密に作りこむ。作品制作にあたり、自分の頭の中を覗き込み、その中に積み重なっているものを拾い出し全体を作り上げていくと語っている。制作過程は、クロッキー帳で繰り返し考えたエスキースをもとに詳細な図面におこし、パーツを丁寧に仕上げる。1995年以降は、月や球体の立体物が影を潜め建物型の作品に移行する。2006年以降、紙を用いた立体やレリーフを制作した。2012年没(享年59歳)。

特徴

オイルステンで仕上げた杉材による繊細な構造のレリーフ。神山は、自分の頭の中を覗き込みながら、その中に積み重なっているものを拾い出し、全体を形づくり仕上げていく。計算された緻密な造形は、普遍的でどこか懐かしさを感じさせる。

作家名	かみやまあきら	作品名	ちいさなこえとちいさなゆめ		
	神山明		小さな声と小さな夢		
	KAMIYAMA, Akira				
生没年	1953-2012	作品名 補足			
出生地	東京都	制作年	1996 年		
No Image		技法 材質	杉、オイルステン		
		寸法	A:59.5×18.5×18.5cm、B:59.0×17.0×17.0cm、C:59.5×17.0×17.0cm、D:59.0×19.0×19.0cm、E:59.0×16.7×19.0cm、F:59.5×19.0×17.0cm、G:59.5×19.0×19.0cm、H:59.0×24.0×24.0cm、I:59.5×18.5×18.5cm、J:59.5×19.0×19.0cm、K:59.0×19.0×19.5cm、L:59.0×20.0×20.0cm、M:59.0×17.0×19.0cm、N:59.0×17.0×17.0cm、O:59.5×17.0×17.0cm、P:59.0×19.0×19.0cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和 5 年度	エディション			
		号数	評価額	1,100,000 円	

作家略歴

1953 年東京生まれ。東京藝術大学大学院デザインの基礎造形及び理論専攻修了。2000-2001 年パリ国立高等装飾学校に学ぶ。1981 年びわこ現代彫刻展入選、ヘンリー・ムア大賞展で佳作賞受賞。1984 年、《たしかこのあたりだと思う》でエンバ賞美術コンクールで優秀賞受賞。本作が転機となり、オイルステンで仕上げた杉材の作品を制作する。1989 年、サンパウロ・ビエンナーレに出品。制作の根元には、大学で学んだ図学の教えとデザイン思考があり、見えないところも緻密に作りこむ。作品制作にあたり、自分の頭の中を覗き込み、その中に積み重なっているものを拾い出し全体を作り上げていくと語っている。制作過程は、クロッキー帳で繰り返し考えたエスキースをもとに詳細な図面におこし、パーツを丁寧に仕上げる。1995 年以降は、月や球体の立体物が影を潜め建物型の作品に移行する。2006 年以降、紙を用いた立体やレリーフを制作した。2012 年没(享年 59 歳)。

特徴

オイルステンで仕上げた杉材の作品。16 点の塔、あるいは森のようなインスタレーション。のぞき窓は、鑑賞者の好奇心を刺激する。見えないところも緻密に作り上げるため、内部にも複雑な構造世界が展開される。神山の作品は「大人のためのドールハウス」「木造宇宙基地」と称された。

作家名	よもぎざわ しょうこ	作品名	Happy Re-Birthday to FUKUSHIMA+SAPPORO		
	艾沢 詳子		Happy Re-Birthday to FUKUSHIMA+SAPPORO		
	YOMOGIZAWA, Shoko				
生没年	1949-	作品名 補足			
出生地	北海道夕張郡由仁町	制作年	2014 年		
No Image		技法 材質	ワックス、ティッシュペーパー、福島と札幌の粘土、糸、ケーキの箱		
		寸法	可変		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和 5 年度	エディション			
		号数	評価額	2,000,000 円	

作家略歴

1949 年、北海道夕張郡由仁町生まれ。1970 年代より銅版画家として活動を開始。二度の渡米を経て、支持体に糸や紙などを貼りつけ凹凸のある版をつくりプリントする技法(コラグラフ)や、石膏や溶かした紙を用いた型取りに取り組むなど、従来の版画のあり方にとらわれない版の拡張ともいえる挑戦を続ける。やがて、それらは古紙やティッシュペーパーをロウで固めた人型のオブジェを無数に配置するインスタレーションの制作へと結実。近年では異分野の専門家と協働しアートとテクノロジーが融合する作品制作に精力的に取り組む。これまで「版の沸騰」(INAX ギャラリー、1997 年)、「夏のオライオン」(有島武郎旧邸、2004 年)、「交差する視点とかたち VOL.5」(札幌芸術の森美術館、北海道立釧路芸術館、2012 年)、「Paper Trail—イメージの回廊へ」(苫小牧市美術博物館、2018 年)などの個展・グループ展や、国際展にも積極的に参加(バーラト・バヴァン国際版画ビエンナーレ、グランプリ、2000 年他多数)。2014 年、北海道文化奨励賞受賞。2023 年、札幌芸術賞受賞。

特徴

2006 年の「北の彫刻展 2006—感性を刺激する素材の魅力—」(札幌彫刻美術館)にて、本郷新の作品群「無辜の民」へのオマージュとしてティッシュペーパーをこより、ロウで固めた人型の作品を制作して以降、艾沢は人型のオブジェに動乱に翻弄される人々へ寄り添う思いを託してきた。本作に用いられる人型のオブジェは 2 種類ある。一つ目は小石をティッシュペーパーでくるみ頭部を形成したもので、これは 2013 年以前に制作された比較的古いタイプである。二つ目は 2013 年以降に制作されたもので、粘土を用いて顔を形成している。粘土は福島県と江別の 2 種類の土を用いており、福島県と江別の土を使ったオブジェは札幌に避難してきた福島出身の人々の象徴であり、集積とは離れたところに設置される。本作は、2013 年の「風と土の芸術祭」(福島県美里町)出品作品《Happy Re-Birthday to FUKUSHIMA》として発表されたのち、「再び誕生日を祝う気持ちで」白いケーキ箱を加えた新しい様式へとバージョンアップし、2014 年「Sprouting Garden -萌ゆる森-」(芸術の森、関口雄揮記念美術館)に出品された。